

博士課程教育リーディングプログラム現地視察報告書(平成28年度)

博士課程教育リーディングプログラム委員会

機関名	九州大学	整理番号	J03
プログラム名称	分子システムデバイス国際研究リーダー養成および国際教育研究拠点形成		
プログラム責任者	高松 洋	プログラム コーディネーター	安達 千波矢
<p>1. 進捗状況概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中間評価結果に対して、本プログラム担当者が丁寧に熱意をもって対応され、プログラム内容はかなり改善された。本プログラムは順調に進行していると評価できる。 ・海外武者修行は留学中の学生のケアも含め、順調に進められている。学生は目的意識をもって前向きに取り組んでおり、学生との面談でも逞しさを感じた。本プログラムの成功例といえる。 ・学生の過重負担となっていると感じられたグループリサーチプロポーザル(GRP)などのプログラムについても現状に合わせた修正が実施されている。しかし、依然として GRP に対して時間的にかなり厳しいとの認識をもっている学生もおり、GRP の重要性など、本プログラムの目指すところやそのためにカリキュラムをどのような考えで設定したかなどについて、学生に定期的に周知する機会を持つ必要がある。 <p>2. 意見(改善を要する点、実施した助言等)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・秋入学を実施するなど、より良い学生の確保に努力がされているが、現時点では応募者数と合格者数が同一である。これは選抜審査がオープンでないということもあろうが、本プログラムの意義より博士課程進学のデメリットを感じる学生が多く、結果的に応募学生が少なく、教員推薦で人数を確保しているためではないか。このような学生の意識を払拭するには、プログラムの趣旨、効果(海外武者修行によるマインド面の強化、幅広いキャリアパス獲得の可能性等)の学生へのPRが必要である。 ・プログラム修了生の就職活動が本格化するに当たって、企業の人事担当者への PR が必要である。例えば新化学技術推進協会(JACI)を通じて、材料系大手企業の人事担当者を集めて、本プログラムの目指すところの説明や学生の海外武者修行報告会等を行い、本プログラム学生に対する採用意欲醸成とインターンシップの積極的受け入れを促すことが望まれる。 ・国際的リーダーなどの理念を実現するために、多くのプログラムを導入して実施している努力は尊敬できるが、本来の目的は「博士としての研究ができ、さらに国際性やリーダーとなる資質を有する」研究者を輩出させるシステムを構築することである。留学経験等でマインド面は強化されるものの、本プログラムがやや総花的で広く、その分浅く方法論を学ぶこととなり、実際に研究能力がどれだけ向上したかについてやや疑問である。研究能力や意欲の高まる時期と本プログラムのために導入したカリキュラムの間の更なる調整が必要であると感じられる。知財、経営学などテクニカルな内容より、別の分野(化学系が物理を深めるなど)で演繹的な思考も磨く(逆に演繹的思考ではモノづくりはできないので、帰納的取組も学ぶ)ことで、研究において広い視野で深く思考し、創造性ある研究成果を導き出すことが本筋ではないか。 ・修士課程の一部学生が奨励金の額が少ないと不満を述べていたが、奨励金、留学費用など本プログラムにかかる莫大な費用が国民の税金で賄われていること、同様の環境の学生に比べて自分達がいかに恵まれているかということに対する認識が低い。本プログラムを通して積極的に学び、大きく成長し、日本の将来を背負っていくことを期待されて税金から奨励金が支給されているということを十分理解させ、真摯に研究に取り組む義務を感じてもらうために、プログラムの趣旨を定期的に周知する必要がある。また、日頃から先生方は努力されているので、折角の努力を生かして学生とのミスマッチを埋めるためのコミュニケーションを十分にしてほしい。 			

- ・博士号取得後、すぐに起業というような考えではなく、研究人生の中で常に起業を意識する基礎が確立されればよいという教育指針で良いのではないか。
- ・学生の目指すキャリアパスの多様性を考慮し、学生が自身の興味に即して GRP を選択できるようにカリキュラムの変更が行われているが、D1 ぐらいから目標に応じて自分でカリキュラムを組めるようにできることが望ましい。